

# 程極明 著 『洪流』

連載第二回（100～114）

抄訳 井手淑子

10 姉、秀華の窮地

## 《第9回までのあらすじ》

主人公の小宝は、1937年の日中戦争開始時は南京に住む小学4年生。大きな商家に生まれた。日本軍の爆撃を避け、小宝一家も長江沿いの蕪湖という街に100人で疎開したが、日本軍の作戦変更により、街は焼かれた。

早々と撤退する国民党の軍隊、その敗残兵の姿を見て、蒋介石は一体どこにいるのかと、幼いながらも心を痛めた。

一方、日本軍に占領された南京の街は焼かれ、無残な姿で、長江には数えきれないほどの中国人の死体が流れ、通りには多くの死体が重なって凍りついていた。中国側の発表ではおよそ30万人

欧米人による「難民地区」も安全でなく、日本兵が若い女子を奪い去り、辱めを受けた彼女らはみな長江に身を投げた。

南京に戻った小宝一家。やがて、中央大学の学生や姉の秀華の通う高校を中心に、1941年の夏、抗日地下組織「團結救国社」が結成された。秀華は延安、重慶の放送を聴き、ガリ版のニュースを作った。小宝も配布を手伝った。

1942年夏、ソ連のスターリングラード攻防戦は彼らに希望を与えた。秀華の友人の中には、地下の共産黨員もいた。

\*この連載は、ホームページ「時事評論士 三ツ山」欄でもご覧いただけます。

ある日、汪精衛の《中央日報》に南京地下三青团全員の名簿が載った。1週間以内に自首すること、しなければ逮捕し、処罰されるとあった。秀華の名もそこにあった。

三青团は、蒋介石・国民党を信奉する正統派を任じる青年組織で、厳密な規律や具体的活動はなく、議論する程度だった。近くに住む秀華の下級生、楊宝華の従兄が、国民党から派遣され結成し、活動費を増やすため名簿をでっち挙げた。汪精衛の特務に目をつけられ、追及されて組織を売った。

秀華は、自分は参加しておらず、勝手に載せられたのだから、怖がることはないと思い、父にもそう言っ

た。しかし用心した《團結救国社》は名前を変え、出版物も停止した。1942年秋、秀華は南京中央大学外国語学部に入學していた。

翌年1月のある朝、秀華は日本人憲兵と汪傀儡特務に連行された。同じ部屋には金女大付属の真面目な下級生たちもいた。

土間の稲わらの上ですっと考えた事。友達を売ったりしない！東北の英雄たちや新四軍の勇敢な精神、岳飛、文天祥や林則徐などの愛国の志士、長征を成し遂げた紅軍、ソ連の十月革命、蕪湖の大火も浮かんだ。

秀華は、楊宝華が、今は汪精衛の模範青年団の責任者だと知った。

『日本人が大東亞共栄圏をうちたてるのは、我々中国人のためなのだぞ、わかっているのか？』と特務は言った。

他方、林家はあちこち問合せ、秀華を探していた。国民党の特務から、傀儡軍に変わり、南京の「感化院」院長として、共産党と抗日分子対策に専念する叔父がいた。父はこの義弟に頼み、娘の行方を問い合わせてもらった。

秀華は日本憲兵隊の監獄に入れられていた。叔父からの賄賂のおかげで、月に1回着替えと食べ物を受けたが、本人には会えず。数か月後、父は金の延べ棒を数本費やして、ようやく彼女を「買い」戻した。

その夜父は木の棒を持ち、彼女を叩いた。『このろくでなし！勉強せず抗日活動なんかやって。あの蒋介石でさえ日本人にたちうちできなかったのに、若い者が何の役に立つ？お前は外出禁止だ。これ以上迷惑をかけるな。』と言った。小宝に

も、『この棒をよく覚えておきなさい。』と続けた。

小宝の心の中の父親像は壊れた。尊敬し好きだった父、姉さんの愛国的な行動は我が家の栄誉であるのに、逆に犯罪になってしまった。父は中国人らしくないと思えた。

中央大学も三青团に参加したという理由で、秀華を除籍した。

## 11 二つの闘い―三輪車夫と学生

姉の秀華の友達の江少英は成績優秀で、中央大学への合格は何ら問題なかったが、彼女は組織の決定に従い、三輪車を製造する会社に入った。

当時、南京の交通業は立ち遅れ、バスは1路線のみ、他は馬車、人力車が主な交通手段となっていた。

そこに新しいものが登場した。三輪車である。綺麗に飾られた車、黄

色に赤の縁どりの車夫の制服の胸には《三輪》の2文字。ラッパやチリンチリンの音は人々の注目を集めた。金持ちの多くはこれに乗るのが好きで、立派になった気分だった。

中国共産党の南京労働者委員会は、学生に偏った活動から労働者への拡大を目指していた。彼女はまずチケット売りとして三輪車夫たちと親しくなった。彼らは江蘇北部から南京に来て、食うや食わずの生活でほとんどが結婚できずにいた。

社長は車夫募集の際、三七の歩合を約束したが、年末には二八、しかも車の修理代を負担させようとした。車夫たちは半年働いても大した収入にならず、結局社長に借金し、病気でも医者にかかれなかった。彼

らはストをすれば弾圧されるので  
どうすればいいかわからず、高校出  
の江少英に相談した。

代表3人でまず社長に会いに行  
った。社長はマホガニーの椅子に足  
を組み葉巻をくわえ、目も合わさず  
に『今、人力車夫は山ほどの。失  
業者も多い。お前たちがいやならど

うか出て行ってくれ。』と言った。

話し合っても無駄だと悟り、ストを  
やることにした。江少英は細かい点  
への配慮を指摘し、特に同郷者が彼  
らの代わりに車夫として来ないよ  
う、社長の本当の姿を伝え、支持を  
訴えて彼らと衝突しないことを強  
調した。

ストのスローガンは『まず生きる  
こと！我々は三七の分配を求め

る！』だった。警察が来て、ピケ隊  
長を捕え、有無を言わさず殴った。

日本憲兵隊は、誰が背後でそそのか  
したか調べたがわからず、彼らの言  
う「王道楽土」に面倒をもたらず社  
長をなんとかするよう市長に命  
じた。新聞も社長の約束違反を書き  
立てた。社長はやむを得ず車夫たち  
と話し合い、三七で修理費も自分が  
負担すると言った。

2週間続いたストは車夫たちの  
勝利に終わった。この闘争を通じて、  
三輪車夫たちは、江少英を信頼し、  
地下の労働組合を組織していった。

中央大学でも「学生救国社」のリ  
ーダーで相談し、食事のまずいこと  
と校長による学生たちの食費横領  
のみに絞って闘い、汪精衛に嘆願し、  
ついに校長をやめさせることに成  
功した。

所属させた。

食費横領に対する学生たちの闘いは、小さな勝利ではあったが、学生の要求にもとづく公然の闘いとして、暗闇の中の一筋の光に思われ

この「学生互助会」は、中央大学で市が承認した合法組織であること、政治に関係ない生活面での互助組織として、学生の参加を呼びかけ、活動費は市が負担した。

当時、南京の繁華街夫子廟は、日本人と漢奸が結託したアヘン吸引所や遊郭、ダンスホールなどが設けられ、映画館も日本映画のみの上映など、低級なエロ文化に麻痺させられ、市民らの唯一の文化的憂さ晴らしは、マーシヤンやカルタ賭博であった。

そこで、「団結救国社」の袁倫や王希虎（上海から移ってきていた）らも参加し、世間知らずのお坊ちゃんたちの理事会の中で、徐々に主導権を握っていく。

南京市長周学昌は、日本人が創った《東亜連盟総会》分会の会長であった。彼は自分の勢力を増大させようと、部下を通して、中央大学の

王希虎はその中の学術係を利用して月1回『学生』を発行した。文芸作品もあれば、秀華（小宝の姉）に翻訳させたロシアの小説や詩、魯迅の名言や警句を引用した《五・四》記念の文、また、国際情勢の客観的な紹介など多様であった。

学生を「学生互助会」に組織し、学生に秘密で名義上は《東亜連盟》に

この雑誌が、日本の傀儡統治下の、文化的に荒廃した南京で出版され

たことは、多くの学生に歓迎され、ひとすじの清流となった。

定期的な音楽会も催され、ベートーヴェンやショパンなどの古典音楽作品を紹介し、南京の退廃文化に對抗する美しい花を咲かせた。多くの学生が魅了され、小宝や希鷹のクラシック好きも、これから始まった。

また小型図書館を開き文芸書を学生たちに広めた。ゴッリキーの『母』、巴金の『家』、エドガー・スノーの『中国の赤い星』など。多くの青年が、これらの本を通して、初めて十月革命やソ連の祖国防衛戦争、紅軍と中国共産党を知った。

また合唱団や合唱サークルも組織した。「この寒い冬をこえ、春がもうすぐ来る、枯れ木に失望するな。」と歌いつつ、涙を流さずにはいられなかった。夏期や冬休みの補

習クラス、女子学生や女子青年向けの『女青年』の発行、女工と主婦を対象にした婦女文化夜学校も開設された。

こうして《團結救国社》は秘密の活動から抜け出し、合法的な組織を利用した新しい道へと歩み始めた。

### 13 アヘン撲滅運動

南京の汪精衛政権は、日本の支配者に、内心多くの不満を抱いていた。日本のタバコ商人が販売する大量のアヘンからの多額の税金は、全て日本人が持ち去り、少しのおこぼれにもあずからなかった。当時の南京の人口はわずか40万人、一方アヘン中毒者は5万人にも達した。

汪精衛はそれを手にしようと、日本側にアヘン専売権を要求したが、

あっさり拒絶された。そこで、宣

する巧妙な闘いでもあった。

伝部長林柏生を通じて《学生互助会》に働きかけ、これを「アヘン・賭け事・ダンスの三害根絶運動」とした。

人民大会堂の入り口にアヘンとその道具、賭け事の道具を積み上げ、燃やした。火は1時間燃え続けた。

夫子廟は孔子廟や科挙の試験場

で学生たちを睨み付けていた。日本憲兵隊は銃を持ち、物凄い形相

もあったが、歴代王朝の首都の歓楽街で、日本占領後は商店や酒場の他、アヘン館、妓楼、賭場、ダンス場が作られ、中国人の一部もそれらに染まっていた。

大会堂で、《首都青年学生アヘン追放大会》を開き、リーダーが演説した。「アヘン戦争に打ち負かされ、

学生たちは議論の末、200人、

我が中国は没落し、ついには半植民地になってしまった。林則徐は英国

3000人と、2回行動を起こした。

帝国主義に反対し、アヘンを禁止し

アヘン館になだれこみメチャメチ

た民族の英雄である。我々は林則徐にならわなければならない。・・・』

ヤに壊した。賭場やダンス場も。没収したアヘンや道具は人力車で運び、車夫たちも進んで隊列に加わっ

た。群衆はますます増え、南京占領以来初めての大デモンストレーションとなった。林柏生にも参加を要請し、2時間

以来初めての大デモンストレーションとなった。日本鬼子の支配に対

後にやってきた彼は、中身の無い、おざなりの挨拶をした。だがこれで、

この集会は合法化した。

小宝も従兄の希鷹と共に参加し、

冬休みには南京の《白面大王》と呼ばれるアヘン王、曹玉成宅を200人で囲み、ベッドに横たわる本人を見つけた。40歳過ぎ、アヘン狂の顔つきで精気がない。布団をめくると、奥の暗室への通路があり、大きな鉄の箱の中に銀紙に包まれたヘロインが34グラム。彼を新街口の孫中山先生の像の前にひざまずかせ、ヘロインを焼いた。民衆は『銃殺せよ!』と口々に叫ぶ。汪傀儡政府に報告し、銃殺を要求した。

麻薬王曹玉成は1944年2月に銃殺された。

感激して、一部始終を姉の秀華に報告した。秀華は具体的な行動には参加できなかったが、勝利の喜びを分かち合った。小宝は特に、影のリーダーと言える任建と袁倫を尊敬していたので、秀華は誇らしく思った。彼女は袁倫を愛していた。任建は中央大学で表面には出なかったが、高校生との連絡に当たり、小宝たちの読書会でもよく話した。彼らは、巴金の『家』やソ連の小説などを通して恋愛や封建制、更には社会主義、第二次大戦など、多くを学び成長した。

#### 14 先輩との別れ

南京の青年学生アヘン撲滅運動

収めたことで、リーダーたちを配下に入れようと、彼らの組織力をほめ

の成功は、様々な影響を与えた。

《模範青年団》に誘ったが、『模範



青年団は日本人の「大東亜共栄圏」を支持しているのです、多くの青年は参加したがりません。』と云われ、どうもコントロールできそうにないと感じ、引き下がった。

しかし、日本憲兵隊はこの事態に注目していた。彼らも汪政府がアヘン売買を手にしたがっていることはわかってはいたが、リーダーたちは金持ちの子弟には見えず、よく勉強する成績上位者で、発言や演説からもその能力がうかがえた。また《模範青年団》のボスのような腐敗墮落、酒色に溺れている風でもない。

特高の石井軍曹は、独特の勘で、リーダーたちから左翼の匂いを嗅

ぎ取り、中央大学に問い合わせ、日本語の流暢な学生、任建を探し当てた。戸籍調査の名で任建の家を捜索し、本をひっくり返したが全て古い

教科書ばかり。かつて2階にあった謄写版印刷機は、秀華の問題が起ってから処分していた。

数日後、石井は中国服姿で任建を訪ね、上手な日本語をほめ、友人として中国語を教えて欲しいと言った。任建は仕方なく彼の言う「友人」となった。彼は度々やって来た。

ある夜、学校からの帰り道、馬上の石井に腕を掴まれ、近くの憲兵隊に連れていかれた。「おしゃべり」と言いつつ、石井は赤い丸を書き、「拡大組織」や「同郷会」について質問した。任建は『私は知りません。』と応えるのみで、石井もどうしようもなかった。

しばらく後、任建は小宝を訪ね、『僕は故郷に帰る。君たちは成長し、僕と袁倫も安心している。いつか機会があれば再び会えるだろう。袁倫

に代わって、お姉さんにサヨナラを  
言ってほしい』と言った。彼らは根  
拠地に向かい、新四軍に参加した。

(つづ)